
Muv-LuvAlternativeOG-未来(あす)への剣-

望夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Muv-LuvAlternativeOG - 未来^{あす}への剣 -

【Nコード】

N9845R

【作者名】

望夢

【あらすじ】

——それは、とてもちいさな…とてもおおきな…とてもたいせつな…あいとゆうきとねがいのおとぎばなし—— 私は託された。ただひとつの『ねがい』……それを叶える為に、私は……

オリキャラ勢紹介（前書き）

キャラと兵器関連を分けてみました。

新訳的に進化した未来^{あす}への剣をお楽しみください。

オリキャラ勢紹介

性：星乃ほしの

名：望夢のぞむ

年齢：20歳

敬語を標準装備した礼儀正しい、麗人に見える男である。

原因は言葉使いと声や顔や身体付きが女っぽいから。

艶やかな黒髪は異常に長く脛辺りまである。

ベーオウルフによって顔の右半分には火傷と眉間から頬にまで走る傷を負い、それを隠すのに包帯を巻き、右腕と右脚もそっくりそのまま自作の機械鎧となっている。

真面目モードに突入すると口調が変わる。

パイロットでありながら技術者や指揮官としても優秀なオールマイティーで努力する天才である。

ニュータイプであり、さらにサイコドライバーの素質をも秘めている。

元々は普通のオタクだったが、世界の管理人によりOGの世界に飛ばされ、生き残る為に戦いつつも、『プロジェクトアーク』の予備計画として『アーカディアンプロジェクト』を立ち上げる。

アクセルやキョウスケとは戦友の間柄で『分の悪い賭けは嫌いじゃない』が自然と身に染みている。

シャドウミラーとの繋がりもあり、スカウトは断ったが物資提供等を行っていた。しかしベーオウルブズに追い詰められた為にプランEFに参加する事になった。

名：マリアール

姓：ブランシュタイン

ミドルネーム：V

愛称：マリア

年齢：22歳

『あちら側』のブランシュタイン家の長女で、望夢の友で騎士のよう
に絶対の忠誠を誓う。

高速戦闘機動を得意とし、やっぱりなのかなんなのか、機体にトロンベと名付けトロンベカラーに塗ったり、美食家だったり、亡霊でも取り憑いているんじゃないかと思う時がある。

望夢とは切っても切れぬ愛すら超越した強い絆で結ばれており、レベルの低いニュータイプだがこと望夢の事になると強い能力を発揮する。

名：アリステル

姓：星乃^{ほしの}

年齢：15歳

戦災孤児で、望夢が保護して引き取った元少年現少女。望夢を兄と慕いながらも恋する乙女の気持ちを抱いていて、性転換手術こそしたが、他はそのままなのでべったんこだが、本人としてはできるだけありのままの自分で望夢をものにしたいのだとか……。念動力者であるが、普段はそんなに強い力はなく、望夢と物理的又は精神的に繋がると、爆発的に力を発揮する。

姓：氷室^{ひむろ}

名：吹雪ふぶき

年齢：56歳

歴戦の名艦長であり、時としては自ら戦場にも立つ戦士でもある。
望夢とは飲み仲間で年齢を越えた友。

姓：葛城かつらぎ

名：広也ひろや

年齢：26歳

士官学校を出てから長年吹雪艦長の下で副官を務めて来た青年。彼もまた望夢の飲み仲間であり、危なっかしくも皆を先導してゆく力リスマ性を持つ望夢を弟の様に思っている。

機体解説（前書き）

オリジナル兵器の設定集です。

機体解説

ゲシュペンストMk-?・ナハト/RTP-007-03C-SP
1N

ゲシュペンストMk-?のデータを基に量産型ゲシュペンストMk-?を強化改造した機体。武装は無限のフロンティアと同じく、ダレイズ・ホーン、5連チェーンガン、シールド・クレイモア、リボルビング・ブレイカー、レイアード・クレイモア。
必殺技に切り札。

ヴァルキュリオン

高機動強襲用AMとして望夢が開発した機体。ガーリオンを母体にATX計画のコブセントを盛り込み、全体的に鈍重そうな印象を受ける程の重装甲になったが、背面2基両肩2基両腰2基計6基のテスラ・ドライブと背部の6基の展開式ドライブ・バインダーによる推進力により、空中では亜音速、宇宙空間では亜光速に至れる機体。しかし、あまりの加速力にパイロットが振り回されてしまう為、乗りこなせるのは望夢やマリール等ベテランでもかなり限られた者のみ。

武装は胸部90mmGGキャノン、左腕の3連ビームキャノン、右腕の大型レールガン、オクスタン・ランチャーを全体的に強化したオクスタン・ランチャーBst、Z・O合金製のサーベル：ロイヤルセイバー、同じくZ・O合金製で超高周波振動する大剣：エクスカリバー、必殺技にソニックブレイカーの強化版で貫通力に主眼を置き、ブレイク・フィールドを円錐形に展開して突貫する『ソニックストライカー』、オクスタン・ランチャーBstの『Wモード』、そしてエクスカリバーにブレイク・フィールドを纏わせて敵を叩き

斬る『エクスカリバー』。

機体の全体的イメージは、ガーバインを一回りゴツくしてファルケンの展開式ドライブ・バインダーを背中に6基、両腰にスサノオのバインダー、左腕と右腕にアーベントの3連ビームキャノンとランドリオンの大型レールガンを着けた感じ。

アーマードヴァルキュリオン

ヴァルキュリオンをマシセル等を使い強化した機体。別名ステイルメイデン（鋼鉄の戦乙女や鋼の乙女）

操縦系はダイレクト・モーシヨン・リンク・システムとダイレクト・フィードバック・システムを採用。制御系にT・LINKシステムはもちろん、ニュータイプの力を有効活用する為にバイオセンサーを装備し機体追従性はトップクラス。

全体的にヴァルキュリオンより二回り重圧な装甲を持つ機体となり、背中のドライブバインダーを取り払い、大出力バーニアを増設。両肩のテスラ・ドライブはツインドライブ化、側面にガーリオン無明の様に内側にバーニアを装備した装甲を追加。機体推進はすべてテスラ・ドライブで行う。

特に巨大化したリアスカート内にもホーミングレーザー発振器による火力強化とグラビコンシステムによる機体軽量化と防御力強化がされている。

質量が増した為にソニックストライカーの威力は3倍に跳ね上がっている。

武装は胸部110mm Gキャノン2門、スカートアーマーのホーミングレーザー8門、エクスカリバー1本、銃槍：オクスタン・ランサー1本、両肘のヴァルキリーブレード、さらにこのブレードを分離・合体させることで斬艦刀となる。オクスタン・ランチャーBstはパルチザン・ランチャーの様に変化し、名はパルチザン・ラ

ンチャーBstとした。

必殺技はパルチザン・ランチャーBstXモード、ソニックストライカー、インパルスストライカー、エクスカリバー、マニニューバーGRaMXs、メイデンドランシング（舞朱雀）、オクスタン・ランサー・フルバースト、コード：麒麟、斬艦刀各種、その他諸々。機体動力にはトロニウム・エンジンと生態エネルギーを使用、望夢の気迫や覇気が強ければ強い程出力が上がりT-LINKシステムやバイオセンサーによりその力はさらに無限の可能性を秘めている。結果的にバランスを無視し、突出した機動性と高い格闘能力と近接戦闘を得意とする機体に仕上がった。

アーカディアンプロジェクト

プロジェクトアークの予備計画として、望夢が発案した計画。天然の島を移動可能な人工島に改造し、各種高性能ステルス技術により、その存在を隠遁し、異星人の侵略をやり過ごしつつ、内部で戦力を整えられるように各種プラントも、最高随の物が使われた。利点は規模がクレイドルより小さい為、予算がクレイドルを造るよりも安い、島を要塞化するのに手間が掛かる。更にクレイドルより籠城戦に不向きである。

竜宮島

アーカディアンプロジェクトの第1号として要塞化された島。望夢の拠点ともあり計画以上の要塞化をされたがベーオウルブズの前では歯が立たなかった。

ヒリュウ級万能戦闘母艦参番艦ヒガネ改

トライロッドバイト級の登場と普及により退役となったヒリュウ級汎用戦闘母艦のヒリュウ改をスペースノア級のノウハウを取り入れて改修した艦。姿形はほぼ変わらないが、内装強化や武装が増え、水中潜航も可能となっている。

コールサインは「ドラゴン3」。具体的には艦首モジュール両側面に連装副砲塔が4門追加、底部に新設モジュールを設けて大型陽電子砲を内蔵。両翼上部にVLS発射口を24門追加、上部に2門下部に2門、連装衝撃砲と連装副砲塔を計4門つつ追加。連装ビームも衝撃砲に換装。

Eフィールドやテスラ・ドライブも強化されている為、防御力は2.5倍、機動力は2.7倍、総合火力は3倍パワーアップしている。

ヒリュウ級万能戦闘母艦四番艦コガネ

ヒリュウ改に続き退役となったヒリュウ級をヒガネ改と同じく改修した艦。ヒガネ改がそのまま赤系統に対し、コガネは紺色でカラーリングされている。

コールサインは「ドラゴン4」

ゴッドグラヴィオン

望夢がコスト度外視でOG世界の技術で再現した特機。色はゴッドΣグラヴィオンと同じ黒ベース。分離・合体をしない分、内臓機構や機能が軒並み強化されており、動力にはブラックホール・エンジンを採用し、出力調整はT-LINKシステムで行っている。

武装に若干ソルグラヴィオンの物を再現している。

外観は黒いゴッドグラヴィオンで、左腕と背部がソルグラヴィオンになっており、グラヴィトンキャノン、ソルグラヴィトンブリンガー、ソルグラヴィトンアークが使える。

ジガンスアーク

吹雪艦長の為に望夢が開発した対特機・対拠点攻略用大型可変特殊人型機動兵器。動力にプラズマ・リアクターを3基搭載している。戦艦形態の航行モードからトランスフォームする事により、全高100mの巨大特機となる。

拠点攻略用とあって全身針鼠みたいな武装と強固な装甲とEフィールドにより、防御力はジガンスクードを超え、総火力はスペースノア級に匹敵する。

戦艦形態はマクロスクォーターの様に両腕が前にコの字状に開き、脚はジガンスクードの物をアステリオンの様に疊んだジガンスパイダ。

人型形態は両腕に砲を備え、指も砲になり、ジガンテ・カンノーネは両肩側面に360度旋回可能な砲台となっている。

機動力はテスラ・ドライブと背部のホーミングレーザー砲を内蔵したブースターパックにより高速戦闘艦並みの機動力を持つが、旋回性能は更に悪くなるものの、戦艦に比べれば充分速いとは吹雪艦長談。

武装はG・サークルブラスター、両腕に計4門装備されている高出力収束連装ビーム砲、指の5連レーザー砲、両脚部の対空3連レーザー砲、胸部のギガ・ワイドブラスター、両肩のジガンテ・カンノーネ、頭部のフォトンバルカン、背部の12基のホーミングレーザー。必殺技に全武装による一斉射の『ジガンテ・バースト』

色は全体的に白で、量産型ジガンスパイダの強化型に見えなくもないが、性能は桁違いであるのは明らかである。

stage 0：未来への咆哮

「大佐、コガネより入電です。無事合流できたとのこと、本艦の到着を待ち、最終組みとして転移すると」

「そうですか……」

5年……この5年間、私の……私含め、様々なモノが劇的に変わった。

私は元々、ちよつと運動が得意な、どこにでもいるオタクだった。でも、ある日のバイト帰りに通り雨に降られて、一瞬けたたましい音と同時に視界がホワイトアウトして、気づいたら銃弾飛び交う戦場……なら良かったんですけどね……。

空を翔ぶ人型、地を駆ける人型……。

現実を受け入れられたのは、目の前に亡霊が落ちて来た時。

中身は一面の紅。でも死にたくない一心で、傷ついた亡霊を駆って生き残った。

そして私の隣にいるマリアと出逢えた事が、この世界での私の人生を大きく分けた。彼女と出逢えなかったら、今の私は此処にいないと断言できる。

「やはり……往かれるのですか……」

「ええ、たとえ自己満足かもしれませんが、それがかつて共に戦った戦友と兄弟子にできる私なりの償いです」

ハガネ隊はベールウルブズにより壊滅。

かつてATXチームのジャケットに袖を通し、今もおそれを着る私が、彼との決着をつけなければならない。

皆を安全に向こう側へ送り出す為にも、そしてこれ以上、私を受け入れてくれたこの世界を壊させない為にも……

『ALERT』 『ALERT』 『ALERT』 『ALERT』 『ALERT』
『ALERT』 『ALERT』 『ALERT』 『ALERT』 『ALERT』
『ALERT』 『ALERT』 『ALERT』 『ALERT』

「ッ！キズが疼く……ヤツだ！」

「ッ……特斯拉研まで後7時間だというのに！」

悲痛に紡ぐマリア。

私は背を向けて歩き出す。

「大佐……いえ、望夢様」

「………私は………いいえ、なんでもありません」

「お氣をつけて……」

「……ええ」

時間と言えば5年。

でも実際には何十年も一緒に居たような感覚……それ程毎日が濃い日々の中、一番付き合いの古い私達に、余計な言葉はいらない。

「吹雪艦長。私のナハトが発進次第、最大戦速に移行。以後は予定通りに」

「うむ。健闘と、生存を祈る」

「ああ。……星乃望夢、ゲシュペンストMk-?・ナハト！出るっ
！！」

フットペダルを踏み、機体の推力を全開にさせ、艦から飛び立つ。

「本艦後方7時半方向より急速接近する機体！識別はアサルト1！
！」

「了解。こちらワルk……いや、アサルト2。これより戦闘領域に入る」

返答を返し回線を切り、戦いに集中する。

コイツだけは片手間で相手できるヤツじゃない。

PTの搭乗時間なら私が上、だが悲しきかな、片方は元凡人、片方

は物語りの主人公格……土台が違い過ぎる。そしてさらに今は……

「あちら側のお前に負けるならば私も潔く納得もいく。だが！こちら側の、今のお前に負けることだけは断じて認めん！戦う理由のない貴様に、負けることがあつてたまるかっ！！」

「戦う理由……そのようなものに意味はない。破壊されるか創りだされるか」

「創造の破壊、破壊の創造……では貴様に問う。その先には何がある、静寂なる世界……そこに何を見る。始まりの地を荒らし、静寂なる世界を創ろうとするのなら、ソラでやればいい。わざわざ地に拘る理由は何だ？」

「お前では理解できん……《異邦人》よ」

「確かに私は異邦人だ。だがこの世界は私を受け入れてくれた。その世界を荒らす貴様を、今ここで成敗する！悪を断つ剣の名のもとに！すべてを撃ち貫く刃金の孤狼を纏い！！」

「静寂を乱す異邦人……肅清する」

「やれるものならば、やってみろ！ベーオウルフ！！」

相対する2機の蒼き孤狼。

違いは中身ぐらいだ。

だが、ナハトとMk-？での勝負は既に見えている。何せ数ヶ月前に一度負けているのだから。

組み合い押し合う2機。力は拮抗しているが――

「推せよ、M k - ? …!」

「く、負けるかあ！推し返せナハトツ！」

推され推し返し、いつこの終わりの見えないせめぎ合い。だがそれを最初に崩したのは――

「蜂の巣と成れ」

「ッ、ならば――!」

M k - ?の両肩の装甲カバーが開いた瞬間に、横に滑る様に左に回避、回り込みながら右腕を引き締め――

「どんな装甲だろうが――!」

リボルビング・ブレイカー、その杭を正確にM k - ?の右肩を穿つ。

「ただ撃ち貫くのみっ――!」

「うわああ……!!」

名は違えども、1からそう造られ、端や別な物から造り変えられても、全く同じ機体。その弱点や間合いは知り尽くしている。

それに私の知る彼ならば今は避けれずとも表面装甲を削る被害で終わり、こちらに逆襲して来ただろう、他の機体ではできぬ同一機ならではの至近距離での賭け引き、彼なら持ち前の悪運で勝利への札を引けるだろう、だが――

「貴様にはできんだろうベーオウルフ、たとえ戦い方は同じだろうともアイツと同じ戦いは!!」

右肩から先を失ったMk-?にたたみかける。もたもたしていれば再生してしまう。

「この距離、もらったっ!!」

シールド・クレイモアと5連チェーニングガンを叩き込みながらブーストをかけ体当たりでMk-?を押し出す。

「つぐ、…私の切り札、切らせてもらおう!」

ダレイズ・ホーンを起動し、プラズマを纏い蒼く光る角を突き刺し

頭部を振り上げ切り裂き、そしてリボルビング・ブレイカーを下からアップパーの様に突き刺し、残った5発を全弾叩き込み最後の1発を叩き込むと同時に腕を斜め上に突き出し衝撃と共に腕を引き、両肩の装甲カバーが開かれ、レイアード・クレイモアを至近距離で喰らったMk-?は爆発の勢いに吹き飛ばされた。

「ベーオウルフ……私の、勝ちだ！」

大爆発を起こしたMk-?。

ひと息吐き、リボルビング・ブレイカーの弾丸を交換する。

確かにベーオウルフを倒したが、嫌な気配は寧ろ強まりを見せる。

「静寂を乱す異邦人……その力、理解不能、理解不能、理解不能――」

それもそうだろう……

「貴様には理解できぬさ、私の……この強さは――！」

ブーストで加速。

「抹消する、その力は危険だ……」

爆煙の中にはボロボロのMk-?の姿――

「許せキョウスケ……」

かつての仲間、戦友に小さく呟き――

「トドメだベェオウルフ!!」

そのコックピットにリボルビング・ブレイカーを叩き込み、トリガーを――

「ぐぼっ……」

トリガーを引こうとした瞬間、視界が紅く染まった。
モニターはひび割れ、下半身の感覚が消えた。

「……や……はり……わた……し……で……は……」

機械ではない、どこか有機的な巨大なモノが、私の下半身を根刮ぎ消していた。

ひび割れたモニターには、コックピットの僅か上を突かれながら右腕を突き出す姿のMk-？。

既に機体の再生の半分以上を終え、赤い無機質な目がこちらを睨んでいた。

「コード……ASH TO ASHッ起動！！私は……最後までっ」

機体を『孤狼』に組み付かせた。

「貴様は道連れだっ、ベーオウルフッ！！」

未練はない。己に出来る事はやり尽くした。

「願わくば……彼等の旅路に……幸あらん事を……」

モニターが弾け飛び、視界が真っ白に覆われた。

「済まないマリアル……アリステルを……たの……む……」

同じ時、テスラ研でひとりの少女が悲しみに満ちた叫び声をあげ、

搬入口でそれを聞いた男は空を見上げ、龍の方舟に乗る騎士は静かに涙を零した。

s t a g e 0 : 未来への咆哮（後書き）

ＴＩの影響を多大に受けています。

感想の方、お待ちしております。

しかし誹謗中傷はご勘弁ください。そっち系の一言は私の心に『魂』
『直撃』の一撃必殺なもので……？

stage 0・5 極めて近く、限りなく遠い世界へ

【……………】

ん……………？何でしょうか？

声が聞こえた気がして目を開くと、そこは真っ暗な空間だった。

あれ？私は確かに死んだはず……………。

【…ねがい……………タケ…ち……………を……………けて】

思念波？…なんでしょう…とても温かいのに、深い悲しみを感じる
…この念は……………。

「ふゝん。やっぱり君には聞こえるんだ」

誰だっΣ！！？

虚空から聞こえた声の主を探そうと辺りを見回しても、誰もいなかった。

「あら、ボクの声も聞こえるんだ。さすが、サイコドライバーの素質を持つ者」

私が、サイコドライバーの素質を持つ者？私はそんな凄い人間ではありません。

「でもボクやあの声が聞こえたのは、アカシックレコードにアクセスできるサイコドライバーの素質を持つ君だからさ」

とにかく、姿を見せてください。そして……

「あなたは、何者なんですか？」

「ボクかい？そうだね、君が理解できて、一番適当な言葉に当てはめるなら、世界の管理人、管理者とかそんなかな？」

世界の管理人、管理者と名乗って現れたのは、小学校高学年と同じくらいの身長の子もだった。そして声から少女と思うが、断定はできない。

「管理人……ですか、予想にはありましたけれど」

「ふふ、君優秀だね。そういう子は、ボクは好きだよ」

「ありがとうございます。ですがなぜあなたは私の前に現れたのですか？」

「うん。ま、とりあえずこれを見てよ」

管理人がそう言いながら指揮者のように人差し指を立てた右手を振

るうと、私の周りに、やけにリアルな地球儀が現れた。それもいくつも……。

「これがボクの管理する世界達。でもその中の1つが何らかの理由で時が進まずに、ある一定の時を繰り返している。これをなんとかしないと、この世界が壊れて、連鎖的に他の世界も壊れてしまう」

「あなたの力で……どうにかできないから私が呼ばれたのですね？」

「優秀な子は説明省けるから助かるよ。そ、管理者は管理するけど積極的な介入は代行者が必要、だからあの声が聞こえる君にしたんだ。でも一般人の君をいきなり送っても死ぬだけだから、あの世界で鍛えさせてもらったんだ」

「そうだったのですか……」

つまり私がスパロボの世界に行ったのも、管理人の仕業だったんですね。

「これからいく世界はMuv-LuvAlternativeの世界だからね。ベールウルブズと互角に戦える君なら、BETAにも負けないよ」

「Alternativeですか……私1人で生き残れますかね？」

「大丈夫」出来るだけ援軍は送るし、拠点も君の島を基に大分手を加えたから、まず死なないと思うよ」

「そうですか、御配慮感謝します」

「いいってば、その代わり、世界をお願いします」

「ええ、任されました」

私は頭を下げる管理人に軽い敬礼で返し、身体が引かれるままに歩き出した。

【お願いします…】

どんな過酷な運命が待ち受けているのかわからない…。

【タケルちゃんを…】

死にまみれた世界の、あいとゆうきのおとぎばなし、そんな世界を、少しでも幸せな形に終わらせられるのならば……。

【助けて…】

「そのネガイ、叶えましょう…」

私はただ、往くのみ！

s t a g e 0 ・ 5 極めて近く、限りなく遠い世界へ（後書き）

変更点はなしです。

タイトルの意味は、OGの地球からM u v - L u v A l t e r n a
t i v e の地球へという意味で使ってみました。

s t a g e 0 1 : 駆け抜ける戦乙女（前書き）

前回までのあらすじ

ベーオウルフに敗れ、死んだはずの望夢は世界の管理人と謎の声の願いを聞き入れ、M u v - L u v A l t e r n a t i v e の世界に渡った。

stage 01：駆け抜ける戦乙女

気がついたら竜宮島の地下要塞——AlvisのCDC、その司令官席で私は眠っていた。

「おはよう、望夢」

あの時はさすがの私も反応に困りましたよ。

なにせ知ってはいても初対面の、しかも美少女が私に寄りかかっていたんですから。

その娘の名は皆城乙姫。

この竜宮島とは別の竜宮島の、いわば管理者の様な存在だ。

本人曰わく、あの管理人の用意したコピーだとか……

別に驚きはしませんでしたが、彼女がいるお陰で、2人っきりな島でも寂しさはあまり感じませんでした。

そして3日、情報収集を行い、これからの事を考えていた。

時は大晦日を目前に控えた1997年12月下旬。

「どうするの望夢？」

「はあ、どうしましょう」

現在の手持ちの戦力は竜宮島とそれに付随するアースクレイドル、

動かせる戦力は人類軍ブロンガー級1隻に3日突貫貫徹で組み上げたヴァルキュリオンと元々島にあったファフナー・マークエルフのみ、防衛戦ならともかく、遠出するには潜水艦1隻に2機の機動兵器では戦力が足りなさすぎる。

今この時も突貫で機体を組み上げているものの、光州作戦が1998年1月という以外はわからない。それに7月の日本本土への『BETA』上陸。

Beings of the Extra Terrestrial origin which is Adversary of human race——人類に敵対的な地球外起源種——通称『BETA』。

それがこの世界と私達の敵だ。

本来、物語の始まりは2001年だが、そこでは間に合わないから、それ以前に私達を飛ばしたのだろう。

今、道は大ざっぱに3つ。

帝国に肩入れするか、国連軍に行くか、竜宮島を拠点に自分達だけでやるかだ。

2番は遠慮したい。国連軍は実質アメリカの隠れ蓑だから、最悪アメリカVS竜宮島なんて構図になりかねない。行くにしてももう少しあとでないと……。

3番はできなくはなくとも難しい。

兵力は最悪Wシリーズを使えばなんとかできるが、予定調和であると3年猶予はあっても、それが絶対とは限らないし、単独行動には限界もある。

「月並みですが、帝国に接触する方法で行きましょう」

「うん。私もそれしかないと思う」

乙姫の賛成も得られた為、道はとりあえず決まった。

それに、帝国……日本は私の故郷であり、2度も人生の分岐点となった場所でもあり、あの地ならば……と、心の中の何かが私に語りかけてくる。

「まずは、やはり光州作戦ですね」

BETAがいかにどの力を持っているか見極めなければならぬし、できれば彩峰事件もどうにかしたい。民間人を護るのは軍人の務めだ。その務めを果たした方が処断されるのを知っている私としては、どうにかしたいというもある。

そうすれば、12・5事件も防げるかもしれない。

「たった1機でできることなんて限られてます。でも、何もやらな
いで後悔するよりも、私はやれることをやってから後悔したい」

「…望夢。アナタはひとりじゃないよ？」

「乙姫……ありがとうございます」

気を使ってくれた乙姫に礼をいいながら、私は詳細な計画を立てる
為に思考を巡らせた。

1998年1月上旬。

ブロンガー級『ミッドランド』にASRSを搭載し、私と乙姫を乗
せて太平洋から日本海へ入る。

今日までの10日でできたことは、ヴァルキュリオンとマークエル
フの調整、護衛のAI制御のバレリオン3機組み立て、各種武器弾
薬を武器庫からはみ出して格納庫半分を占領する程準備するので精
一杯だった。

「それじゃあ、行つて来ますね」

「無茶はしないでね、望夢」

「ええ、わかってますよ」

心配そうな顔で見上げる乙姫の頭をそつと撫でる。

乙姫は今回は艦内待機。まだファフナーに乗ったばかりの上に、マークエルフではヴァルキュリオンの機動力に追いつけない。それにバレリオン3機では万が一ミッドランドを守りきれぬ保証もないからだ。

私はヴァルキュリオンを見てふと思う。

仲間達は無事転移できただろうか……。

紺色に彩られた鋼の戦乙女……。その名の通り、死者を選ぶ「選び抜かれた者にしか扱えない機体」。

私達のこちら側でも2機しか造られなかった機体。

「ハッチが開いたよ望夢」

「ああ。……星野望夢、ヴァルキュリオン、出る！」

鋼の翼を広げ、テスラドライブ推進特有の緑色の光の帯を引きながら大空を舞う。

??? side

「…チクシヨウツ…チクシヨウツ…!!」

みんな…みんな死んだ…同じ部隊だった隊長も…他の連中も…初陣でどうか緊張してたアタシを励ましてくれた…気のいい奴らだったのに…なのに…アタシにはなんもできなかった…助けらなかった…みんな、目の前でBETAに殺されたっ…!!

「チクシヨオオオオオオオー!!!!!!」

アタシはF-15の両手に持たせた突撃砲を乱射した。一発一発に怨みや殺気を込めて。

「弾が!くっ!」

弾切れになった片方の突撃砲を捨て、近接戦闘用短刀を装備してBETAの群れに突っ込む。

「この…ヤロオオオオオオオー!!!!!!」

アタシは要撃級を撃ち抜き短刀で切り裂きながら暴れまわる。けど、そんな中で突然アラムが鳴った。

「っ！？」

その方向——左斜め後ろに目を向けると突撃級が突っ込んできていた。

「ぐあっ！」

ギリギリの回避運動。直撃は避けられた。でも左の跳躍機を持っていかれ機体も吹き飛ばされる。

「ぐう……」

何とか機体を立て直そうとする。

けどそんなアタシの耳には耳障りな音が聞こえ始めた。

ガリガリガリガリガリッ

「っ！？」

それはBETAの中でも1番多く衛士を食い殺しているBETA――戦車級がイーグルの装甲を噛み砕いてる音だった。

「くそお…こんなとこで…」

近づいてくる死にアタシは恐怖を覚える。機体はすでに両足が大量の戦車級に噛み千切られ立つこともできない。

「（アタシは……死ぬのか…みんなの仇も討てないまま……）」

悔しい、でももう何もできない。

諦めかけたそのとき、通信機から大声が聞こえてきた。

『オクスタン・ランチャーBestEモード！撃ち貫けっ！！』

眩い光がイーグルの周りにいた要撃級と突撃級を消し飛ばした。

そしてアタシの目の前に、翼を生やして緑色の光を翼から放つ紺色の、見たこともない戦術機が空に浮いていた。

「天使……」

戦車級の耳障りな音が耳に入らないほど、アタシはその戦術機に魅了されていた。

s i d e O u t

望夢 s i d e

私は空を駆け、光線級や突撃級を大型レールガンとオクスタン・ランチャー B s t の B モードで撃ち抜きながら戦線を転々としていた。

既に司令部方面に対してはミッドランドから支援攻撃を加えており、僅かだが拮抗状態には持ち込めた。これで撤退にも時間をかけられる。

避難民の難民キャンプにはマークエルフを向かわせた。いざこざはあっても乙姫なら上手く纏めてくれるだろう。

また新たに突撃級を撃ち抜いた所で、強い怨みと殺気を感じた。その方向に機体を向ければ、B E T A の大群の中で孤軍奮闘してい

る1機のイーグルがいた。周りの残骸を見る限りもはやこの辺に生き残りはいないのだろう。

私は機体を加速させた。

ドライブバインダーが唸りを上げ、光を撒き散らす。

イーグルは突撃級の攻撃をなんとか避けたもののバランスを崩して転倒し、戦車級に群がられていた。

「あれを避けるか…やはり、ここで死なせるには惜しい！」

先ほどの突撃級の攻撃。あれは並みのパイロット——この世界では衛士か——ならば直撃していてもおかしくなかった。それをあの機体は避けたのだ。恐らくかなり反射神経がいいのだろう。操縦技術はまだまだ未熟のようだが、磨けば立派な衛士になれるだろう。

「オクスタン・ランチャーBstEモード！撃ち貫けっ！！」

私は0ガンダムよろしく、イーグルの頭上から正確に周りの要撃級や突撃級をEモードで撃ち抜いた。
続けてロイヤルセイバーでイーグルに取り付いている戦車級を斬り払う。

「聞こえるか？そのイーグル。直ちにベイル・アウトしろ！」

『お、お前……いったい？』

「話は後だ！死にたいのか！」

私がそう言つとイーグルの衛士はすぐにベイル・アウトし、それを私がヴァルキュリオンの手で回収し、他のBETAが近づいてくる前に空へと上昇し、コックピットのハッチを開く。

「さあ、速く乗れ。そうもモタモタしてられん」

するとその衛士はヴァルキュリオンの手を伝つてコックピットに入ってきた。

その衛士は褐色の肌で濃い茶色の髪。乙姫よりも小柄でおそらく少女だろう。しかし、どこかで見たような気がしなくも……

「スゲエ……なんだよこれ？」

少女はヴァルキュリオンのコックピットを見て感嘆の声を漏らす。

ヴァルキュリオンはその特性上、他のガーリオン系AMよりもモニターの視界が広い。それ以前に有視界モニターのコックピットだからなのも関係してるのだろう。

「悪いが速く私の膝の上に座ってくれ。急ぐのでな」

「はあ！？／＼／」

私の言葉に少女は顔を赤くする。確かに女性に対してはあれな発言だがこの少女はかなり小柄だ。私の膝に座っても障害にはならない。Gがかかるのはしょうがないがそんなものはどこにいても同じだ。逆にGの影響でどこかに頭をぶつけられたりする方が困ってしまう。特にモニターとかスイッチだとか……

「すまないが早くして欲しい。でないと移動もままならない」

そう言う少女は渋々私の膝に座る。その顔は真っ赤だ。

私は一瞬苦笑いを浮かべるが、すぐに顔を引き締めコックピットを閉じる。

「行くぞ、しっかり掴まっている」

私は少女にあまりGがかからない速度でヴァルキュリオンを飛ばす。

「（キョロキョロ）」

膝の上に座っている少女は物珍しそうにコックピットの中を見回している。

「そんなにこの機体が珍しいか？」

「当たり前だろ！こんな戦術機…見たことねえ」

それもそうだろう、何せ今回が初お披露目なのだし。

「加速するぞ、歯を食いしばれ！」

「ぐうつ！」

バレルロールで光線級のレーザーをグレイズし、仕返しに大型レールガンを撃つ。高度を地表スレスレに下げ、光線級を撃ちながら要塞級へ、エクスカリバーを抜きながら突っ込む。

「つ、突っ込むのか！？」

「安心しろ、このヴァルキュリオン、あの様な烏合の衆に遅れはせんっ！駆け抜けるヴァルキュリオン！疾風が如く！！」

ヴァルキュリオンのツインアイが力強く光り、エクスカリバーを下段構え、機体と刀身にブレイク・フィールドが収束する。

「約束された勝利の剣……エクス——カリバアアアア——」

「！！！！」

雄叫びと共に剣を振るいながらBETAの群を突っ切ったヴァルキ
ュリオン。

「我に、断てぬ物なし！」

エクスカリバーを鞘に収めた瞬間、モニターを覆い尽くす程に映っ
ていたBETAがすべて消し飛んだ。

『エクスカリバー』……エクスカリバーの発する超高周波振動をブ
レイク・フィールド内に閉じ込め、指向性を持たせて放出する。即
ち飛ぶ高周波の斬撃で広域殲滅に使うもよし、放たないまま敵を叩
き斬るもよし、臨機応変の効く必殺剣。

「べ、BETAが……消し飛んだ……っぐ！」

「ち、キリがない……」

舌打ちをしながら、迫るレーザーをエクスカリバーを振るい弾く。

「レーザーを剣で弾いた……なんなんだよ、ったく」

少女の声にはもう呆れが混じっていた。
レーザーを弾くなど普通なら不可能だ。

これは私がニュータイプだから、エクスカリバーがZ・O合金製だからできる芸当だ。

『望夢！聞こえる？望夢！』

「乙姫か？どうかしたのか？」

モニターの片隅にディスプレイが現れ、乙姫の姿が表示された。

『難民の避難は終わったよ。司令部も撤退を始めるって』

「そうか、ご苦労だったな乙姫。先に戻って撤退準備をしてくれ」

『うん。気をつけてね』

乙姫との通信が切れ、機体を後退させつつBETAを撃ち抜く。

「行きがけの駄賃だ、受け取れ！」

大型レールガンとオクスタン・ランチャーBstの実弾、90mm GGキャノンの弾をすべて撃ち尽くし、私も本格的に撤退する。

「な、なあ……」

「なんだ？質問ならあまり受け付けられんが」

「いや……その………やっぱ…なんでもねえ」

「…そうか」

あえて訊き返さず、私は撤退中の部隊——国連軍に彼女を預け、ミッドランドに帰還した。

ASRSを展開したミッドランドは、無事誰の目にも捕まらずに竜宮島への帰路を進んでいた。

「まったく無茶をすると言った人が無茶してどうするんです？」

「うめんなさい」

私は乙姫の腕に包帯を巻ながら軽く叱る。

ミッドランドの格納庫に帰還した私の目に飛び込んで来たのは、右腕を失いそこかしこがボロボロのマークエルフの姿だった。

レコーダーによれば、撤退する部隊を援護する為にひとりで殿を務めていたらしい。散発的だったとはいえ、撃墜数は1個連隊規模程。初めての戦闘で、しかもひとりでここまでやったのだから怒りすぎるのもダメだろうと思って軽くしておいた。

手当てを終えて寝てしまった乙姫をそのまま医務室のベッドで寝かせ、私はブリッジの艦長席に腰掛けながら今後のことに考えを巡らせた。

stage 01：駆け抜ける戦乙女（後書き）

次回予告的何か

光州作戦に介入するも、史実の通りに処刑されてしまった彩峰中将。
望夢は未来を少しでも変える為に日本の地を踏む。

かなり内容が変わった第1話でした。

いろいろ考えた結果、光州作戦はともかく明星作戦に参加した方が
話しを進めやすいと思って、こんな始まり方になりました。

次回も頑張ります故、よろしく願います。

stage 02：束の間の休息

光州作戦の翌日。

望夢はワルキューレの岩戸で竜宮島の全機能と自らを接続していた。

このシステムは、ファフナーでの乙姫と竜宮島をモデルとし、空中にミールの代わりにマシンセルを筆頭に様々なナノマシンを散布し、ミールの代わりを務めさせている。

それだけに、望夢も島の全ての機能を好きに動かせるのである。それをする事で、あの管理人が用意した島が自分の島なのかを確認をとっているのだ。

「システムチェック終了。……やっぱり問題はアースクレイドルですか」

アースクレイドル……

その施設内容は私の知っている物とほぼ同じではあった。でも大きく異なるのは……生産ラインが不自然なまでに少なすぎるからだ。さらにまだまだ何かしらありそうだけれども、アースクレイドルにはまだ充分にナノマシンが行き渡っていないため、サブコンピューターからアクセスして一応生産ラインは動かせるものの、全てを把握し動かすには直接出向いてメインコンピューターにアクセスするしかないようだ。

「さて、何が出てくるものやら……」

私はワルキューレの岩戸を出て、さっそくアースクレイドルへ向かうことにした。

アースクレイドル内部は、それこそ私の知るアースクレイドルとは何も変わりはないかった。

そう、見てくれは……

「は、はは、なんなんだ……これは……」

メインコンピュータ・メイガスにアクセスした私は、ただ笑うしかなかった。

システムにアクセスし、データベースに目を走らせて見れば、生産

記録にガンバスターだのイデオンだのゲッターエンペラーだの、明らかに可笑しすぎる項目が見て取れた。さらに調べてみれば、ざっと数十万人にも及ぶ名簿録があり、プロフィールと、その人物が何をしたのか等の行動記録がリンクで表示された。

「これは……」

恐らく私の前任者達の歩んだ記録。

10人分を流し読みしたが、人選……性別、年齢、社会的立場、何もかもがバラバラで、一般的な人物は死の8分を越える前にしんでいる。

その他には超兵器を量産しBETAと真つ向勝負を挑んだが、物量を質で埋め合わせても更なる質のある物量で推されて死亡。中には米国とG弾の打ち合いや、エルトリウムで恐怖政治紛いの独裁体制で地球圏からBETAを退けたものの、BETAの内部侵入を許し、内側からやられたというのもあった。

「正に地獄にようこそ……ですね」

この世界の先任が新米に送る言葉を暗にこのデータベースの名簿録の人々に言われた気分だった。

いったん萎えた気分を取り戻し、生産ライン系を調べる。どういった仕組みなのか、このアースクレイドルの生産ラインは、物資がなくとも生産が可能らしい。

「ポイント制？」

気になった項目を開く。

ポイント制

ここ、アースクレイドルの生産ラインは原料を必要とせず、ポイントにより物資を生産可能である。

つまりは、Gジェネ的システムなのだろうか？

「あ、まだ続きが……」

なお、実際の生産時間をかける事により、ポイントを消費せずに生産可能。

ポイント制にしますか？YES/NO

つまりは、時間をポイントで買うか否か……

Gジェネ的システムか、生産費なしのギレンの野望的システムなのかだ。

「NOですね、これは」

理由は簡単。

造りたいもののポイントが足りない場合はそれが造れない。
しかし時間をかければ造れるのなら私はそちらの方がいい。そちらの方が怪しまれずに済むし、スケジュールも立てやすい。

非ポイント制が選択されました。

生産ラインの拡張を行いますか？YES/NO

「YESと……」

すると、3種類の項目が現れた。

食品系、日用品系、兵器系の生産ラインが拡張されました。拡張には5日を予定。以後順次生産待機。

私はその後幾つもの項目を確認し、選択する。

そしてアースクレイドル内部に食品系2つ、日用品系2つ、兵器系5つを拡張し、さらに出来上がり次第の命令も出しておく。

さらに人員関係についての項目もあり、量産型Wシリーズやバイオロイド兵、さらにはスターウォーズのドロイド兵、さらには私の知るアニメやゲームの様々な登場人物の名もあった。そしてその中に部下達の名前はなくある意味でホツとしつつ、安否が不安にもなった。

私はそれなりに慣れもある量産型Wシリーズの生産に踏み切り、ラ

ボの拡張も行った。彼等に会うのは10日後だ。

「そろそろ切り上げませんとね」

時計を見れば、アースクレイドルに入ってから4時間経っている。そろそろ乙姫が寂しがる時間だ。ちなみに乙姫が寂しがりなのを知ったのは光州作戦の2日前だった。

ヴァルキュリオンの最終調整に5時間かけていたら泣きつかれ、翌日1日中服の端を掴まれて過ごしたのは微笑ましく記憶に新しい。

いくら達観して大人びて見えても、彼女は12歳のひとりの女の娘なのだから。

アースクレイドルから帰った私はさっそく乙姫にこっそり絞られ、今はCDCで、島の防衛体制の強化を始めた。乙姫を膝の上に乗せて……

「……楽しいですか？」

「うん。望夢の髪ってサラサラしてて面白いよ」

乙姫は私の膝に座り……いや、身体に寄りかかりながら私の髪を弄っている。

ちょうど鼻先に乙姫の頭がくるから、女性特有の甘い香りが鼻を擦る。

「ねえ望夢」

「为什么呢？」

「この島は、幸せでいっぱいだったんだね」

唐突にそんな事を訊いてきた乙姫。

「いったいなぜそんなことを……」

「この島のミールが教えてくれたんだよ、この島のこと全部」

「ミール？……マシンセルですか？」

ミール……フェストウムは私達の『こちら側』には居なかった。な

のに乙姫はミールと言った。

それに近い役割を果たさせているのがマシンセルだ。だから私はそう言い返した。

しかし乙姫は首を横に振る。

「この島にもミールはいるよ。ううん、産まれたって言った方が正しいのかな？この島に満ちているモノが、望夢のイメージを取り込んで形を変えた。でも形を真似ただけで結局は変われなかった。それをあの管理人の子が手を加えて純粋なミールにした……って、言ってる」

「そ、そうなんですか……でも、それって大丈夫……ですね？」

「うん。この島のミールは、私の島のミールとは随分違う。この島のミールは望夢達を見て命の循環を識ってる。命の重さと大切さを……」

乙姫のその言葉に安堵する。

自分は乙姫のようにコア型フェストウムではないのだ。

島なんて同化はできないし、そんなことになってしまっただけは戦うこともできなくなってしまう。

「幸せ……か」

瞳を閉じて島が平和な時を思う。

インスペクターを退けた後の束の間平和な時。

ゼゼーナンを倒した後の束の間の平和な時。

戦いの中で散りゆく仲間も大勢居た。

下手したら私に関わったが故に死んだ人もいるのかもしれない。それこそ神のみぞ知る所なのかもしれない。

でも、少なくとも、あの時間だけは……本物だった。

「……わかりません。人の価値観で幸せというものは違いますから、……でも、私は幸せでした」

それは紛れもない事実だ。

一度戦いから逃げていた私が造り上げたゆりかご……。

しかし、再び戦いを決意した理由でもあり、異邦人の私の唯一の帰る場所でもあった。

「次は半年後ですか……」

私は幾分リラックスしてコンソールに再び指を走らせる。ホント、乙姫には助けられてばかりだ。

1998年7月。

BETAが北九州に上陸。台風上陸が重なったことも災いして一般

市民の避難すら満足に行うことができないまま九州・四国・中国・近畿がわずか一週間で壊滅。犠牲者は3600万人（日本人口の30％）にも上った。

斯衛軍主導による首都防衛戦が展開されたが、BETA上陸から1か月後には首都京都が陥落。京都陥落直前までに皇族、政府機能、一般市民の避難を完了させ東京へ遷都。最終的にBETAは関東の西半分まで侵攻、横浜でのハイヴ建造を許してしまう。

この戦いの鍵はやはり台風がネックである。自然にあらがうのはまず不可能に近い。

ならBETAを水際で食い止めるしかないが、私達の今の立場ではそれも不可能に近い。

ならそれ以前に帝国と接触を図るしかないのだろうか……

「鎧依さんに会えないものですかね」

鎧依左近——帝国情報省外務二課の課長であり、曰わく怪しいおじさん。

しかし彼と接触できれば、帝国内部の親米派に気づかれずに帝国とのパイプを作ることできる。逆をいうと、彼に会わなければ話が進まない。

それか、ヴァルクイオンで超高々度から直接京都の政庁に降りるか……

この場合、120％の確率でギクシャクした関係から始まるのは火を見るより明らかだけれど。

「難しいものですね、世の中」

かつてはブランシュタイン家の長女であったマリアが居たから、足場を作るのはまだ楽だった。

でも今回はそうはいかない。

自分で1からやらなければならない。しかし、これに関しては管理人に感謝したい。

OG世界での経験があるから、こつも考えがまわるのだから。

「とりあえず、今日はここらで切り上げましょう」

「ホント？ねー望夢、海に行こう！」

「はいはい」

私はコンソールから指を離すと、私の上からどいた乙姫と手を繋いで外へ出る。

束の間の平和を噛み締めながら、私は次の戦いに向けて思い馳せるのだった。

s t a g e 0 2 : 束の間の休息（後書き）

最近GジエネやACFAをやってるせいでOG成分が減っていく可能性大！

はあ、乙姫みたいなキレイでかぁいい妹が欲しい……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9845r/>

Muv-LuvAlternativeOG-未来(あす)への剣-

2011年4月29日11時11分発行